



共古日録

三十九



|      |
|------|
| 特別   |
| 15   |
| 1413 |
| 41   |

Handwritten Japanese calligraphy in cursive style, including the characters '東京' (Tokyo) and '郵便' (Post). There are also several circular postmarks and a red seal impression on the envelope.







人とい視すに多しなりと云ふ故に之を為す中  
かたし後なり  
釋者若し形を免ふ事には疑を以て接みず時  
ドラス徳を識みむと疑たる老人と死し愈せたるに免  
ふ事なきものなり自らその身を以て投ておのが肉を捨  
リドラス乃其を疑はる徳を以てこれに  
輪を以て  
スキコの時説るに月中の影は中が月を向て投し  
たる免ふ事なり  
と云ふ山中の力も種族の時説あり昔人の言あり  
後を尋する大罪を犯したるゆへを投てられて今日の如  
き影を生せしと云ふ

云々モカ種族の時説に男女兄弟ありが男は月ある故に  
この日に影を以て種族あり日はさき曲者の面に影を  
たれば後三月の影を以て種族ありと云ふに逃れ去り  
ぬと云ふと云ふの如く今にありと云ふ  
影を以て種族ありと云ふに影を以て種族ありと云ふ  
はかたし月影の遠近にありては曲者なりと云ふに影を  
の見せし未知の材を以て種族ありと云ふに影を以て種族  
日月の影を以て種族ありと云ふに影を以て種族あり  
市場影を以て種族ありと云ふに影を以て種族あり  
高きより下より人常の影を以て種族ありと云ふに影を以て種族  
人常の影を以て種族ありと云ふに影を以て種族あり  
樹月影を以て種族ありと云ふに影を以て種族あり

影也此語差違

月中の鬼磨也若此定家記云月大徳之宗清而成也

法苑珠林注云西國傳云道者有免之行善也故行天帝試之常由於意始身火中天帝怒之取其焦鬼置於月

之身令未未一切家生與有瞻之知是道者善哉行慈

太平御覽卷一傳云擬天向曰月中何有免特樂

海影物あり淮南子曰月中有物者山河影也其言處處

月中に蟾蜍なり雨陽影也長慶中有人既八月

十五夜月先屬干林平如近布其人專視之見一金光

散影疑是月中者工部員外郎嘗說此事忘姓名

以二月中黒らとて就て其國信託信をふし過ぐとす

又月影對するは多時此の量諸に

十五夜は月影而るあがからすともかくすなる金丸

でかくせ又如事のお月影ともをす

迎ひ共古の端居する大久保の量其方位の者月影は雪が月

光をさきどりしや

お月様障子をかあけお月様障子をかあけ

とらたかお月様障子をかあけお月様障子をかあけ

は夕時代のは月を照らし雲を思ひ金丸の祭礼の日





南方の猿の  
記す

高に繩してゆき丸しものとき  
此等の地は多くをすやが身長の  
多き猿の様だがたれ年一り大陽の  
必と此記をよむ猿を記してある  
こゝに中々多し形跡向老志たれ  
王孫は猿を皮物とす毎年三月十日  
其形を解いておに三又許りの古  
序多し人はず其刀を杖つて  
と和州藤原山考に猿は天竺  
の北の方より井の坊に弘治作  
猿の西の諸嶽如來の峰を指し  
の東の群嶽其窟を仰る奉る  
西域記を引たり

有馬名所  
燈抄

伽婢子  
の  
記す

有馬名所人形筆とて物より人形のもの筆ある  
ものを見ても天知三冬十歳九月吉有馬上より有野を  
おろす東の枝の有馬名所銘に人形筆あり  
出づつて我とてこゝも人形筆のものもある  
持まはす人形筆のほらうはらう一節のまのあつり  
巻きたち人形筆と雲象の日月にかゝる軸の地なる  
軸よりなる竹まわらうと云ふ人形筆はかゝる娘か  
世は春にやあつたあつた人形筆  
おぼ揚枝とてものひまあつたあつたかえまのもの  
さう揚枝を温泉にすたと崩色にほらうとて逆のま  
伽婢子は有馬名所に記す  
此井より水が實に二年前燈抄記す



の事柄に鑑みしを擬して俗間傳ふところの怪談  
奇事を綴りたるもの其中に文明年中長柄の増都昌  
快のこゝ頂田く下に角ある帽をかき直る或昔にして  
秋父知通と名まじり者まじり話ありこれに和同開珎  
の精中理のふれてありか出来しなる話の出放は傳異志  
に琴文本としくあり夏りやかく者あり名子と曰  
上清書と元室考奉すと其姿をたれば青圓角の  
窮して清の青交せり文書と景観の盛衰を  
得ては外伝の本まゝ忽ち其形をなすす文本  
甘文七條見一は五條を撰たり文本を  
後井より出せし高貴と名り官中書令と名しと  
を

一  
九年  
の  
事  
柄  
に  
鑑  
み  
し  
を  
擬  
し  
て  
俗  
間  
傳  
ふ  
と  
こ  
ろ  
の  
怪  
談  
奇  
事  
を  
綴  
り  
た  
る  
もの  
中  
に  
文  
明  
年  
中  
長  
柄  
の  
増  
都  
昌  
快  
の  
こ  
ゝ  
頂  
田  
く  
下  
に  
角  
あ  
る  
帽  
を  
か  
き  
直  
る  
或  
昔  
に  
し  
て  
秋  
父  
知  
通  
と  
名  
ま  
じ  
り  
者  
ま  
じ  
り  
話  
あ  
り  
こ  
れ  
に  
和  
同  
開  
珎  
の  
精  
中  
理  
の  
ふ  
れ  
て  
あ  
り  
か  
出  
来  
し  
な  
る  
話  
の  
出  
放  
は  
傳  
異  
志  
に  
琴  
文  
本  
と  
し  
く  
あ  
り  
夏  
り  
や  
か  
く  
者  
あ  
り  
名  
子  
と  
曰  
上  
清  
書  
と  
元  
室  
考  
奉  
す  
と  
其  
姿  
を  
た  
れ  
ば  
青  
圓  
角  
の  
窮  
し  
て  
清  
の  
青  
交  
せ  
り  
文  
書  
と  
景  
観  
の  
盛  
衰  
を  
得  
て  
は  
外  
伝  
の  
本  
ま  
ま  
忽  
ち  
其  
形  
を  
な  
す  
す  
文  
本  
甘  
文  
七  
條  
見  
一  
は  
五  
條  
を  
撰  
た  
り  
文  
本  
を  
後  
井  
よ  
り  
出  
せ  
し  
高  
貴  
と  
名  
り  
官  
中  
書  
令  
と  
名  
し  
と  
を

一  
九年  
の  
事  
柄  
に  
鑑  
み  
し  
を  
擬  
し  
て  
俗  
間  
傳  
ふ  
と  
こ  
ろ  
の  
怪  
談  
奇  
事  
を  
綴  
り  
た  
る  
もの  
中  
に  
文  
明  
年  
中  
長  
柄  
の  
増  
都  
昌  
快  
の  
こ  
ゝ  
頂  
田  
く  
下  
に  
角  
あ  
る  
帽  
を  
か  
き  
直  
る  
或  
昔  
に  
し  
て  
秋  
父  
知  
通  
と  
名  
ま  
じ  
り  
者  
ま  
じ  
り  
話  
あ  
り  
こ  
れ  
に  
和  
同  
開  
珎  
の  
精  
中  
理  
の  
ふ  
れ  
て  
あ  
り  
か  
出  
来  
し  
な  
る  
話  
の  
出  
放  
は  
傳  
異  
志  
に  
琴  
文  
本  
と  
し  
く  
あ  
り  
夏  
り  
や  
か  
く  
者  
あ  
り  
名  
子  
と  
曰  
上  
清  
書  
と  
元  
室  
考  
奉  
す  
と  
其  
姿  
を  
た  
れ  
ば  
青  
圓  
角  
の  
窮  
し  
て  
清  
の  
青  
交  
せ  
り  
文  
書  
と  
景  
観  
の  
盛  
衰  
を  
得  
て  
は  
外  
伝  
の  
本  
ま  
ま  
忽  
ち  
其  
形  
を  
な  
す  
す  
文  
本  
甘  
文  
七  
條  
見  
一  
は  
五  
條  
を  
撰  
た  
り  
文  
本  
を  
後  
井  
よ  
り  
出  
せ  
し  
高  
貴  
と  
名  
り  
官  
中  
書  
令  
と  
名  
し  
と  
を



天の光のひかりたるは海のひかりの如く  
をさすは海に錦の如く  
をさすは海に錦の如く

三階の松は色よ

松の枝三段に錦の如く

上階の松は色よ

三階の松は色よ

松の枝三段に錦の如く

上階の松は色よ

三階の松は色よ

松の枝三段に錦の如く

今の花は色よ

松の枝三段に錦の如く

上階の松は色よ

三階の松は色よ

松の枝三段に錦の如く

上階の松は色よ

三階の松は色よ

松の枝三段に錦の如く

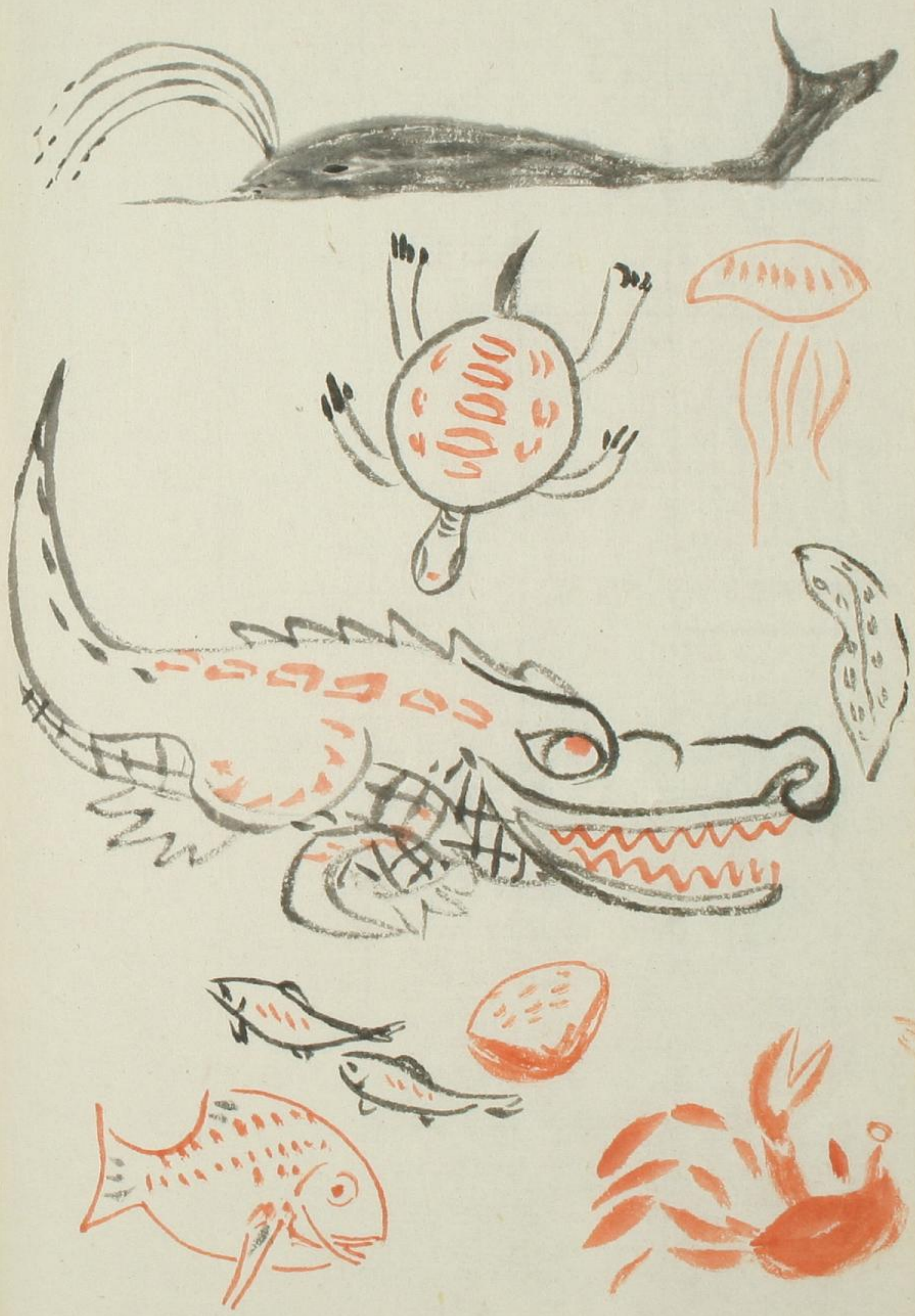
上階の松は色よ

三階の松は色よ

松の枝三段に錦の如く







鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 皆同 平聲 十五咸 韻 二テ五カシ

鳥ノ物ヲ歌ヒテ亦鳥ノ名

唐ノ元稹 送崔侍御之南 詩

南 須 羣 已 盡 果 重 鳥 先 鷓

唐ノ葉 莊 鷓鴣

鷓鴣 木 陀 羅 尼 鷓鴣

鷓鴣 如 有 鷓鴣

鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣

鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣

鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣

鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣 鷓鴣

身統あるもの思ふとあさねあざなう都下にいとほかへる御つ  
つあるものと思ひしと思ひしとあまの多く御あまの御  
つみたるつつをえり書さす

嘉吉二年 禰江 天教二年 正月晦日 明應

永正七年 妙忍祥尼 三申二年 文明

明應二年 延文元年 文永二年  
猶也つつに尋ねてをぐく見し

とせり御布のつらさなるか共古抄に意定の厚く御  
見て何にすべし枚研の道なかりし御ありしとあるか  
ゆれば布となりし跡の青光御方立の善海方の如く今也

火葬の  
墓制の

火葬の凡三位以上及別祖之宗謂別祖者別祖也始祖也  
並猶管墓以外不謂別祖者別祖也始祖也又墓皆立碑記其官姓名之墓を  
あり別祖の家分の別祖謂別祖者別祖也始祖也又宗一の長を是れう後三位以上  
別祖之宗の外ハ墓を造るをも猶さすなりとありたり  
されどもは葬後を最言は墳墓を造りて碑を建て姓名  
を勒するを別せしむのみして園墓を造り墓誌を造り  
事は禁せしむあり其正河内の高屋村人の墓誌は  
室永七年なり因幡の伊福古部のは和銅元年なり  
火葬の後の墓を造りしは三位七位の墓なり又和銅元年  
に葬れる吉備國勝國依天の母の墓及天平十一年に葬れ  
る吉備真備の母何れも墳墓を起ししとあり又何れも墓誌  
を造りしとあり今別後あり三位以下のものは園墓

神前並に  
祭

と嘗み墓迄せりありしを以て  
神代に於て亦以て祭と見えたるは墓祭の古也と  
ありしを以てに毛るは有馬村の墓凡そ後取祭  
の墓のわきやありぬらん有馬の村にありしは  
祖考の墓に極美せり向けて祭とありしは  
此の墓の墓の墓を以て佛殿に供す古也の墓  
凡そすまじく人情の然らしむ事なり  
板碑には延享二年の文あるものありしは生前の信  
意を以て安んじし生の境墓を告るを事なりと  
其の墓の墓身なるもの古きは聖徳太子傳の  
推古天皇廿六年戊寅十二月の条に大正原駕料長墓  
所賢造墓者直入墓内四角を謂大右曰此處以斷

壽藏  
墓石の工  
信

つらまの  
墓石の  
慶長以後の

彼處必切欲令應然子孫之後  
らに後世の事成なり又此の墓  
切れし所の墓石を造らばか  
墓石の水を掃き掃き掃き掃き  
は致すも後の面をば水の通す  
と云ふの通すは好む事なり  
火のにおきしは  
江戸及遠國の墓石の  
長年可なり其の  
の宗を以て守りしめ  
其塚に墓石を造らしめし  
慶長以後の



三河の怪火  
三河の怪火

三河の豊後村に怪火ありこれハ年中ありて此  
の者あり流るるを以て見ると大法師なりこれを見れば  
そのよこさばいふ言はくは火を以て来りて怪火と  
大法師はゴビン様と云ふと火を以て来りて怪火と  
豊後村の如く老の法がゴビン様と云ふ

一里と云ふ  
長短あり

一里と云ふは所々長短あり二十里あり十八里(中國)  
三十二リ一里の重何處乎八十里何處能野道又五十二里  
とありて多岐に城研一里を以て一千五百里對朝國界を  
三千里を以て二百里を以ていこらの里数と見ゆ  
此の道は東に北に南に北に南に北に南に北に南に北に南に  
ありて多岐に定まらざる道なり此の道は東に北に南に北に南に  
其地を里数中ならざる道なり此の道は東に北に南に北に南に

鬼割り

昔のころ増城大英堂老割葵餅並蓮を以て  
其味可なり



文福茶釜

の如く此の景をの如く此の侍を以て鬼面の数は葉なる  
つげし此の如く此の侍を以て鬼面の数は葉なる  
今はまだ此の如く此の侍を以て鬼面の数は葉なる  
の丸に今瓦の如く此の侍を以て鬼面の数は葉なる

意匠  
面白  
す食物  
は見え  
ていふ  
もの形



三羽に故の天明三羽の年別が三羽友故と題せし書あり  
手紙を録し書あり諸語を吟み而して著しと三羽の年別は

大松寺井戸の三羽の年別あり  
とありは三羽の年別あり  
とありは三羽の年別あり  
とありは三羽の年別あり

大松寺と云ふ書あり

三井寺観音千子  
三井寺観音千子  
三井寺観音千子

三井寺観音千子  
三井寺観音千子  
三井寺観音千子  
三井寺観音千子

三井寺観音千子  
三井寺観音千子  
三井寺観音千子  
三井寺観音千子

三井寺観音千子  
三井寺観音千子  
三井寺観音千子  
三井寺観音千子

予が心せし  
たが桂月の  
とを年々  
同定の東  
の山水中  
を氣と

二年又一年七十有年あるの人生の行路亦なすべし  
飛びくちり去らむとす草木と同しく枯つとふも  
せよめよ名に馳らぬ勢に馳らぬ利に馳らぬ煙に馳  
らぬけかならざる人間の心智の深小策略を弄して蝸牛  
角上に新生管々たる世の祈禱偉人言然傑天世の化に  
参して高に何の神ぶ所を感少の野また那翁の  
馬蹄を平せり古来野心のあまには火鬼火鬼相並ん  
で哭す萬古亦却山は時ち水は流りたけりさ  
は自然のまことなる哉  
若くは大河桂川とが南東の山水中にしるされたる  
こがらの心せし物たるものゆゑにそらく予亦年  
の老翁天命を樂しむべし物之のみ

十返舎一九の中へ修の端をよびて  
愛敬の外に類の中へ修端のここの名心のよき  
大河桂川を家まゝとて其れ類まよふと  
古も今も変りけり修端をばけり名公のよき  
其中へ修の端の所井上重徳と其世の方言をしる  
其類の首を此れとて其れ類まよふと  
其れ(歩め)とてしるにまげぬ類(此馬)ぶちやと  
其れ(歩め)とてしるにまげぬ類(此馬)ぶちやと  
あやけぬえ(其れ氣多)よせよと見らるの叱らぬ  
あぢや(さらば)よまへえと離すちんころ  
がず草履用なるば訪(村は)つれ  
ちやいりむ坊(穢多)の住まふあたりを













甘酒生薑のみやげもの

甘酒の冬より夏にかけては、お茶の味も甘酒の味も、さっぱりとした感じがする。お茶の味も甘酒の味も、さっぱりとした感じがする。

十月革命の店中、甘酒の味も、お茶の味も、さっぱりとした感じがする。お茶の味も甘酒の味も、さっぱりとした感じがする。

旦那さん、甘酒の味も、お茶の味も、さっぱりとした感じがする。お茶の味も甘酒の味も、さっぱりとした感じがする。

高人十月廿日、甘酒の味も、お茶の味も、さっぱりとした感じがする。お茶の味も甘酒の味も、さっぱりとした感じがする。

今、お茶の味も甘酒の味も、さっぱりとした感じがする。お茶の味も甘酒の味も、さっぱりとした感じがする。

甘酒の味も、お茶の味も、さっぱりとした感じがする。お茶の味も甘酒の味も、さっぱりとした感じがする。

甘酒の味も、お茶の味も、さっぱりとした感じがする。お茶の味も甘酒の味も、さっぱりとした感じがする。

甘酒の味も、お茶の味も、さっぱりとした感じがする。お茶の味も甘酒の味も、さっぱりとした感じがする。

甘酒の味も、お茶の味も、さっぱりとした感じがする。お茶の味も甘酒の味も、さっぱりとした感じがする。

甘酒の味も、お茶の味も、さっぱりとした感じがする。お茶の味も甘酒の味も、さっぱりとした感じがする。

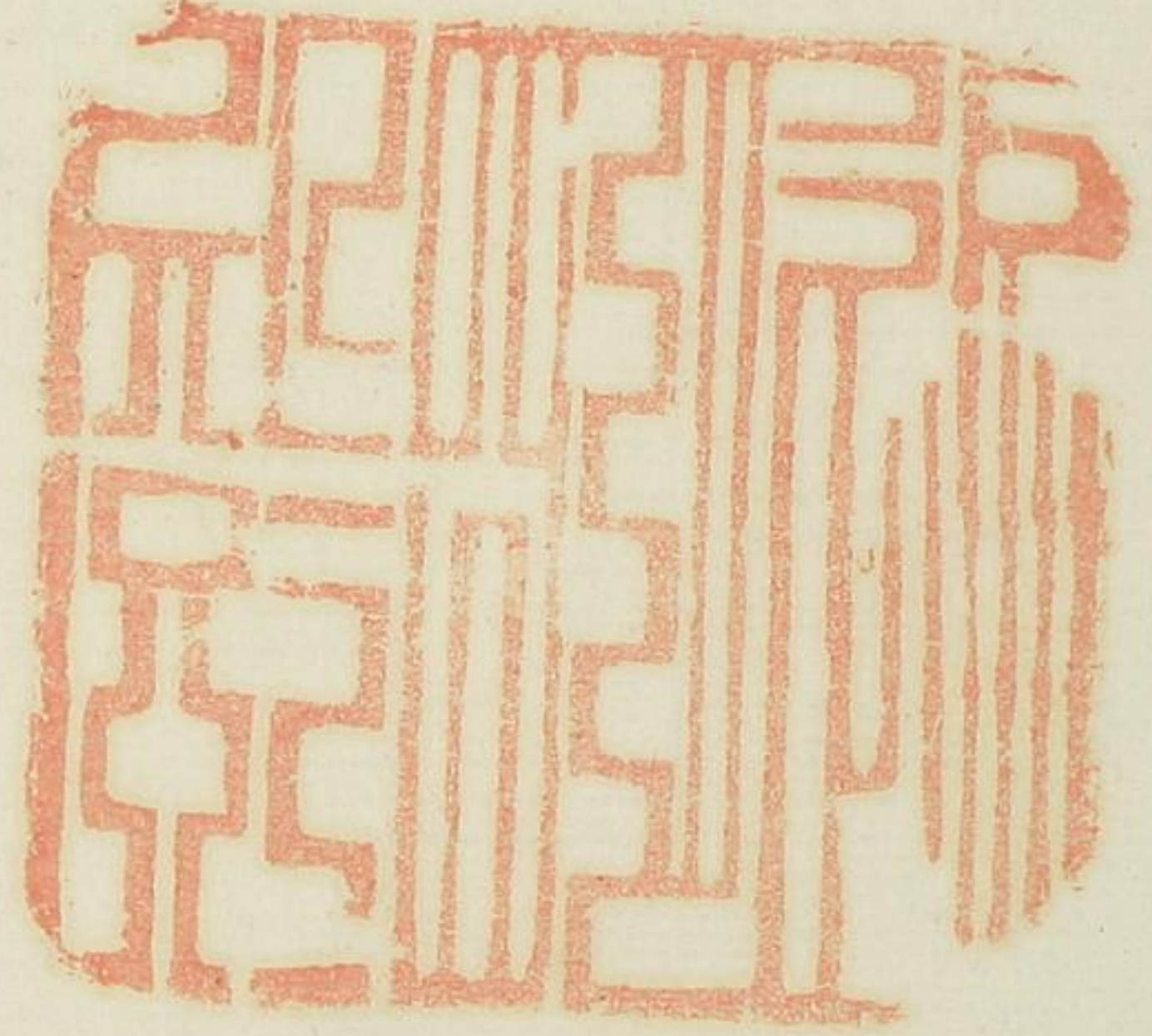
甘酒の味も、お茶の味も、さっぱりとした感じがする。お茶の味も甘酒の味も、さっぱりとした感じがする。

甘酒の味も、お茶の味も、さっぱりとした感じがする。お茶の味も甘酒の味も、さっぱりとした感じがする。

甘酒の味も、お茶の味も、さっぱりとした感じがする。お茶の味も甘酒の味も、さっぱりとした感じがする。







双風可載  
いほは百也

磯丸の家

火前邊の  
の敷

火前番名

越ヶ谷の油金と  
火林の堂

男二人の好風 其ノ 元敏の可申及にすめる業店刻製して百也  
とふもこれとある業店は向谷の山崎とて業店が茶家  
いそあり白心松島寺と暮あり萬曆院同資百也  
寛政五冬三十二月廿二日  
磯丸の家 伊良多より二里路南なり

火前邊の油金は三十二枚あるもの由此の黒火工町に  
在りて修繕し又新造せしとて  
火前番名は一番とて又一本とて又火前番  
大年番寺の及ありとて  
越ヶ谷の油金とて向谷の山崎とて  
火林の堂とて今も在りす此の書火林の司

大相模大聖  
寺の増定傳  
大相模の板碑

江戸の板碑  
板を銅い  
るゝ火災  
せぬかと

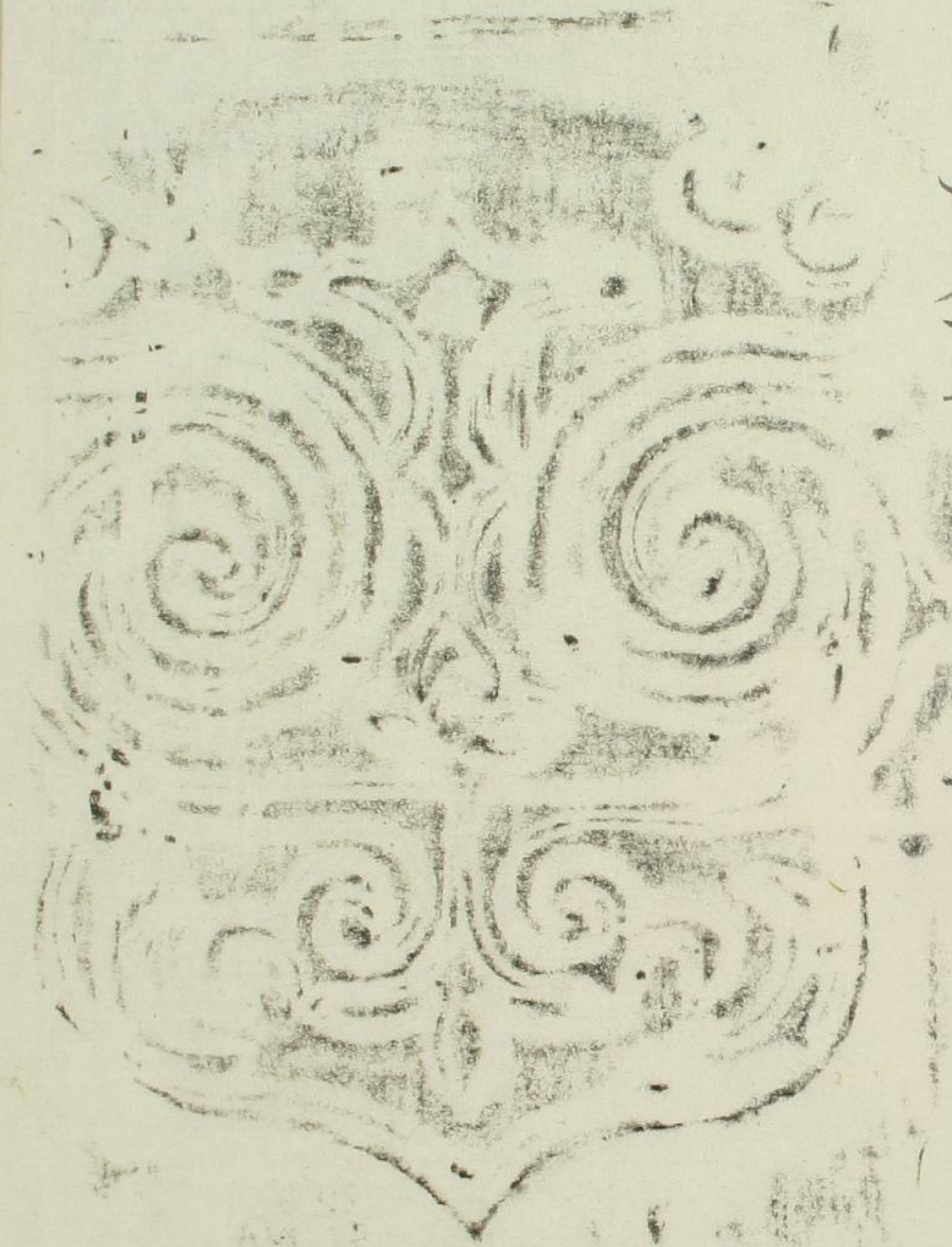
筋の量は光りてゐる火のうとこは有徳なる寺の量  
致なるゆゑと  
大相模西三村大聖寺の住持定傳とあるのあり天正十  
八年の火をうけた寺の板碑の石の破れたる物あり  
ふ又大相模の嘉祿元年の板碑あり  
江戸の板碑を銅いするは火災を免れんとて運ばる  
て廻りの石板に火災を免れんとて運ばる  
つてゐる銅いありとこは天正十年の石の破れたる物あり  
死せる埋り板の石は天正二年とある物あり  
この寺にあり(板碑)

自居板碑  
火災の法  
種族の  
持来らし  
器具の  
燭形

カルド種族所用

キグイ村

カニガタ



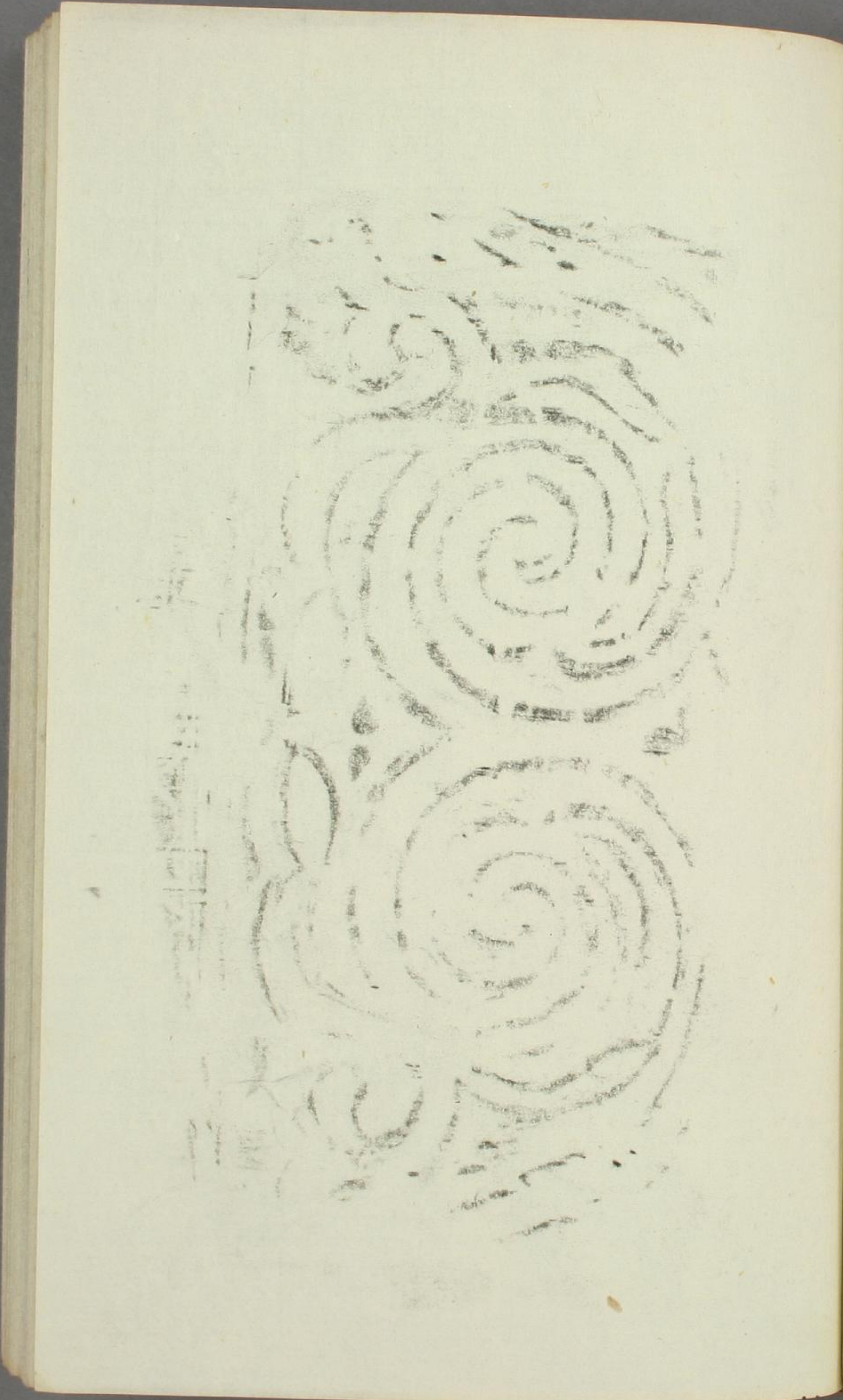


ユルド  
輝及  
キブ  
イカ

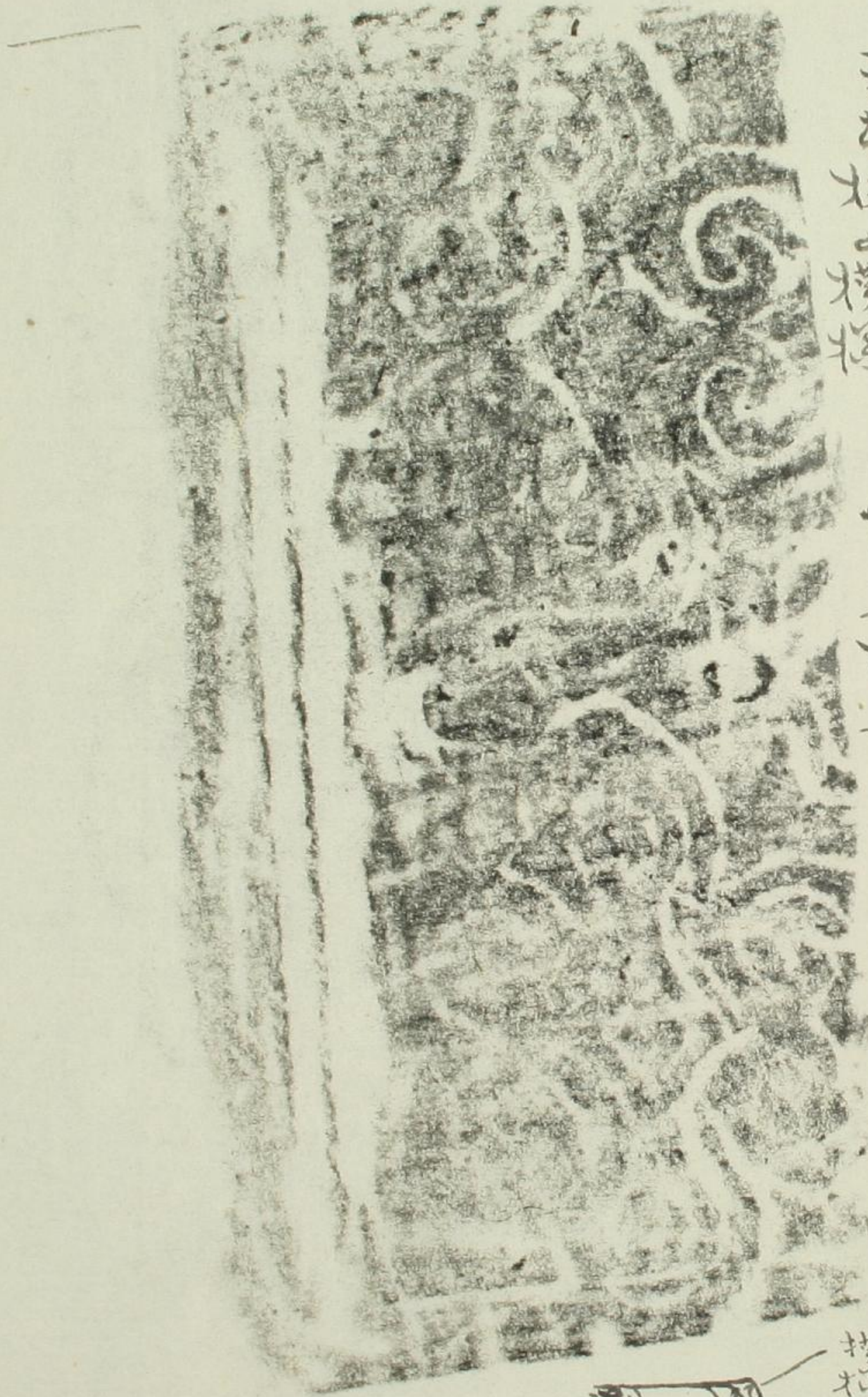
カ  
ン  
ハ  
及  
袋  
模  
様

蓋  
の  
模  
様

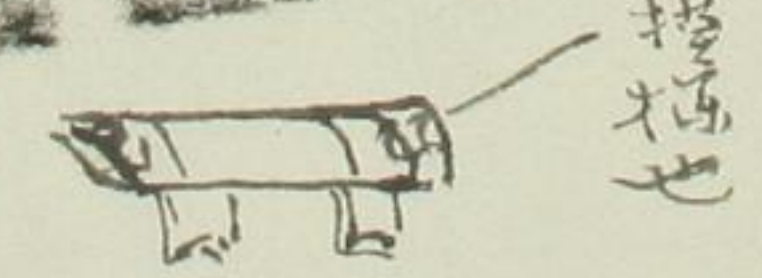








カルス村ギリヤリ増子所用  
まら板の模様

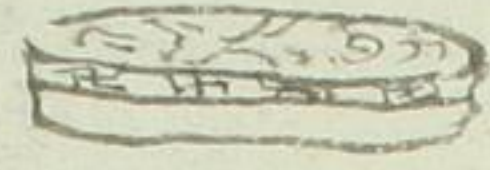


増子  
大板

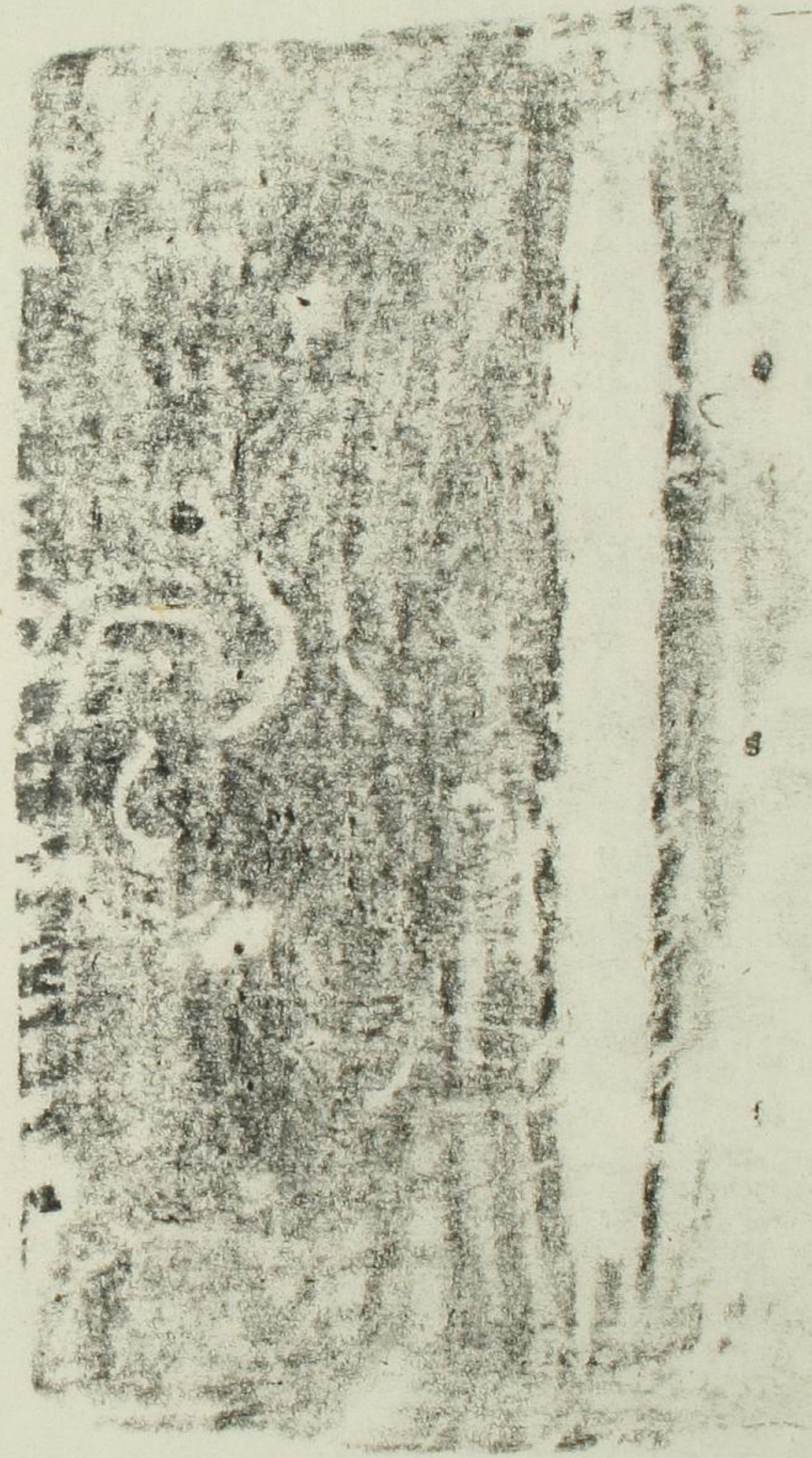
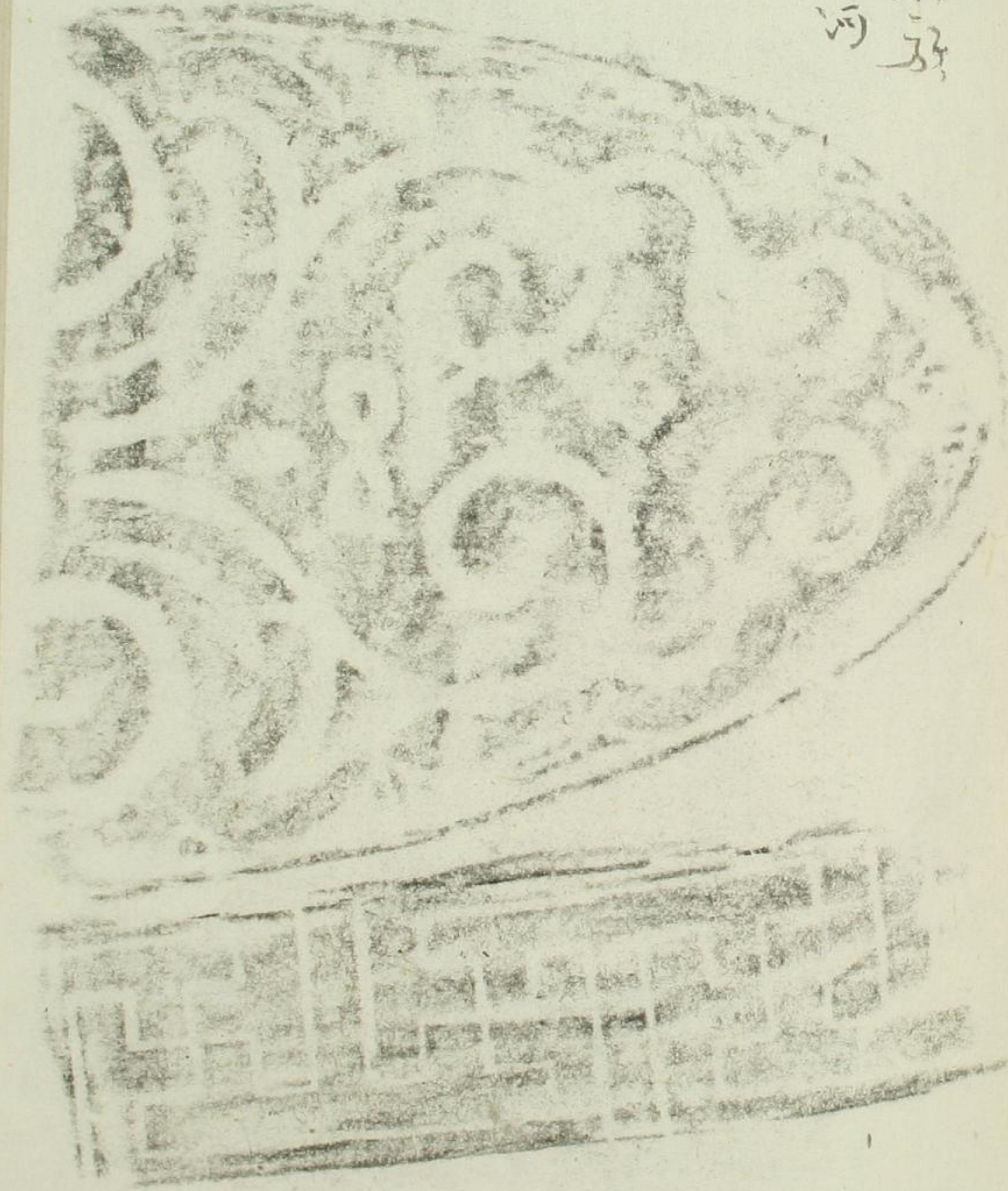


1100

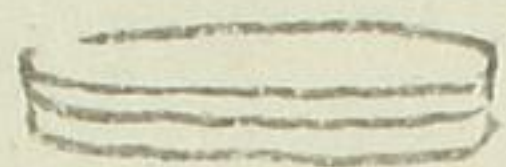
ゴールド  
ツングトス河



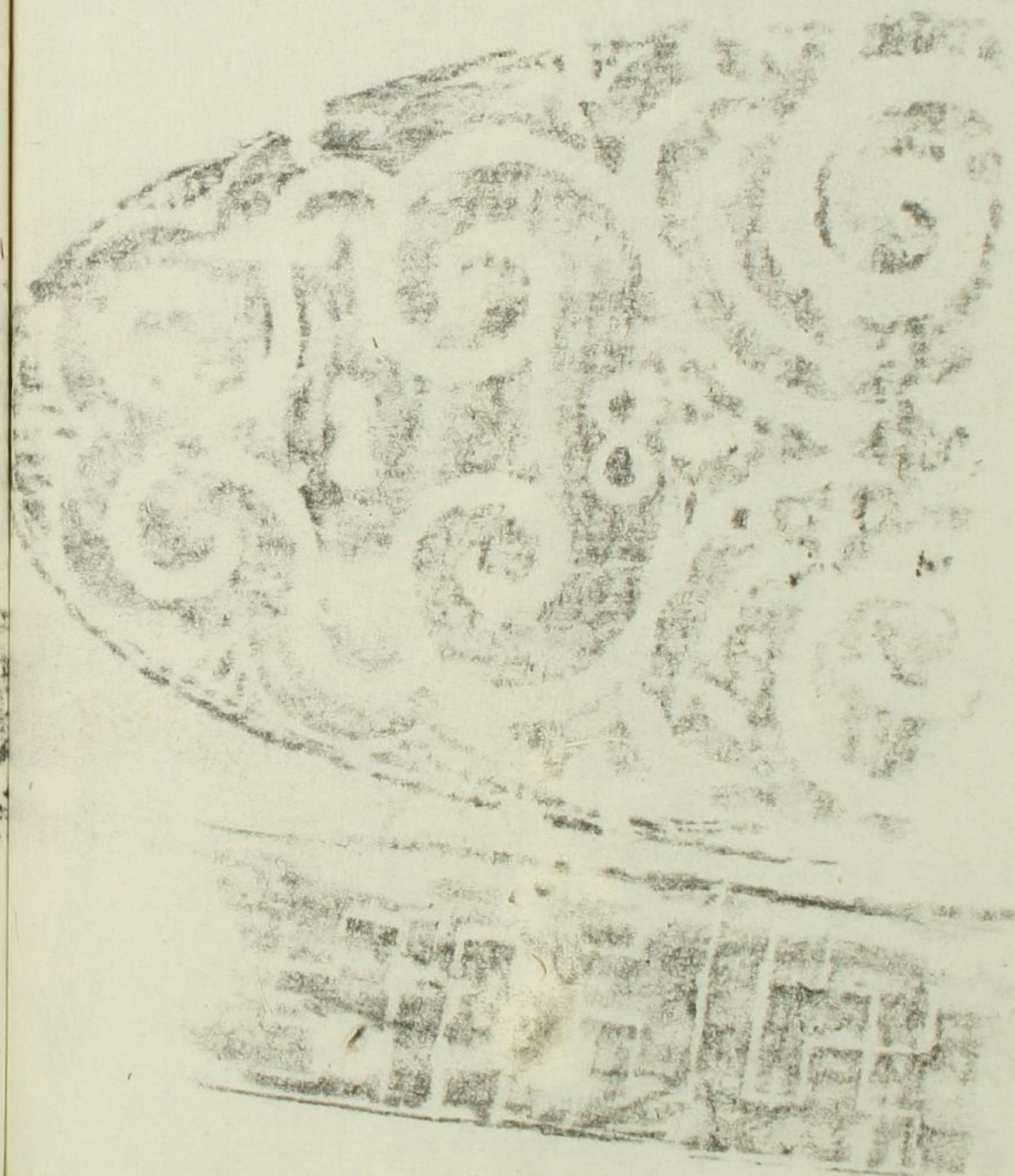
木  
の  
切

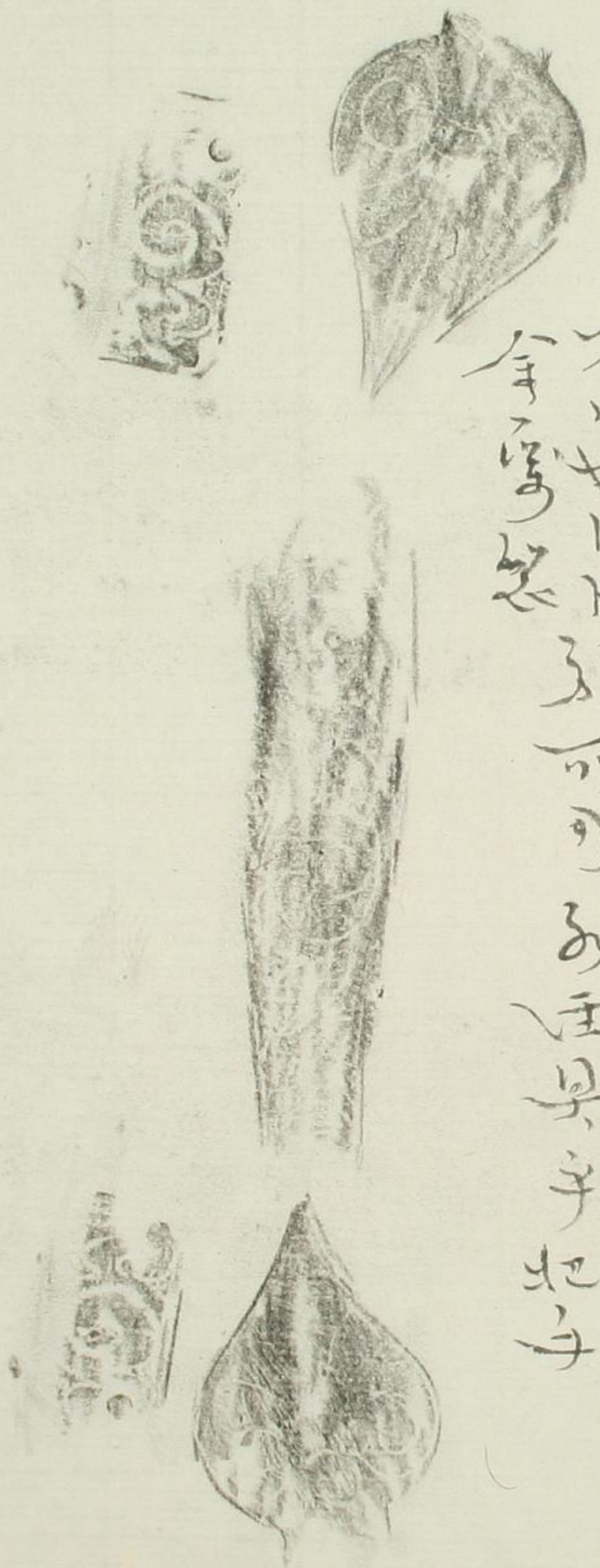


木製  
 山々の  
 縁部  
 横切  
 心部の  
 構造



キリヤ  
 短  
 テン  
 木





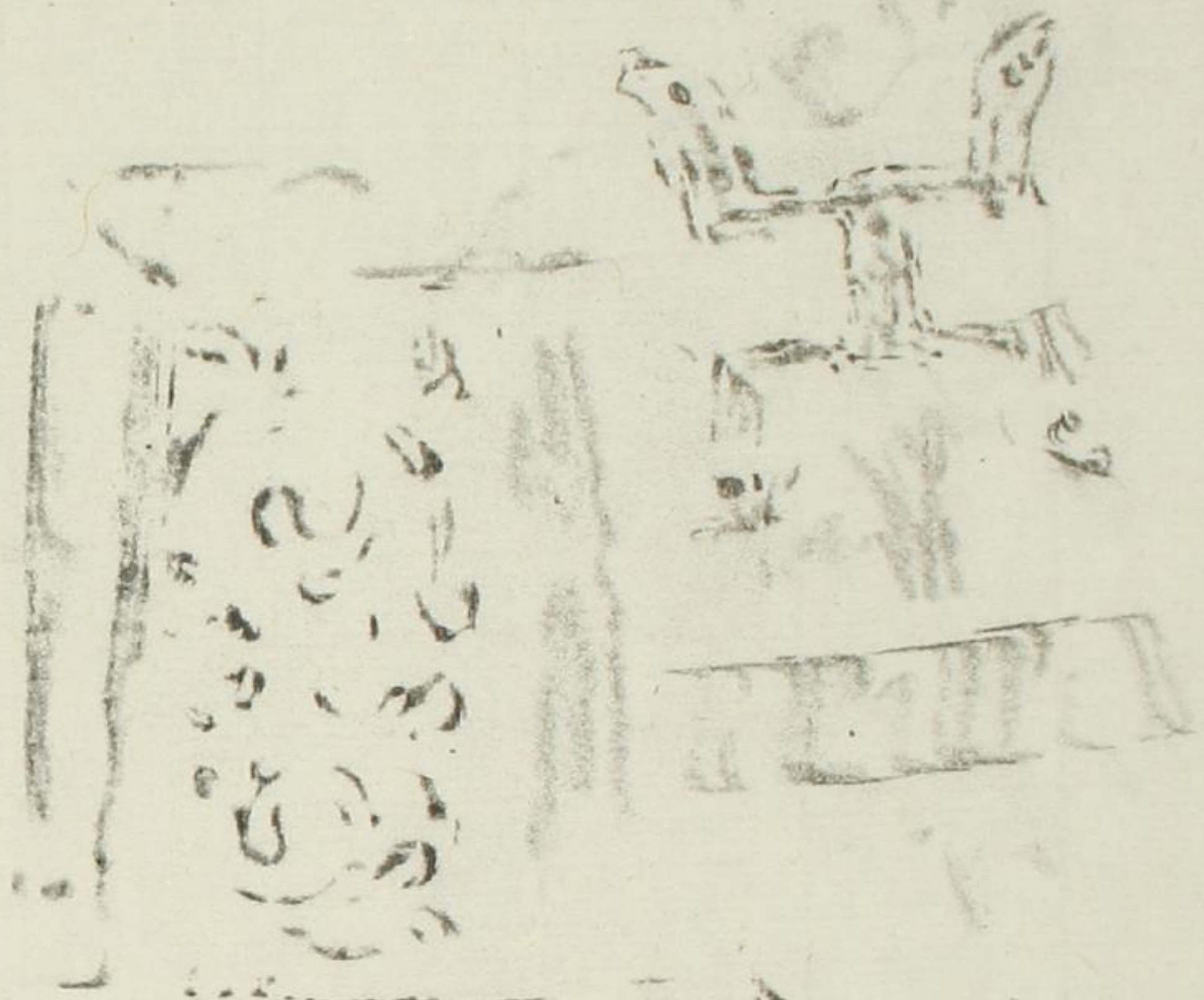
フリヤーが  
 全葉を  
 取り  
 可  
 子  
 注  
 具  
 子  
 記  
 子





ギリヤーク種カハルササの用木製器具

皮紐をゆ下げる道具  
金具ニツクかきこ用  
金具ヤ録様下正を



葛葉園の  
戸永の宮に  
在り

大正九年二月十日比叅園生館様ニテ致して右如く  
言あり其由陳列されし御玉の白かんば樹皮を製  
せし様様木惣若葉を彫刻しある様様及今更  
若く飾し今更の面々又繩文出若葉とし今更  
かその中石華を置きて大略せ給て様様形を  
内々考へしものしりしものしりしものしりし  
内々考へしものしりしものしりしものしりし  
燗浦の葛葉園に在り一箇印塔あり銘に何れより持来り  
しものしりしものしりしものしりしものしりし

應永卅二年  
十二月廿二日

元禄初年  
記す所の  
録其心著  
名りしもの  
等

元禄三年の枝りし西國道なる下三冊の頁々  
三年に編みしものしりしものしりしものしりし  
し書りしものしりしものしりしものしりし  
等しりしものしりしものしりしものしりし  
其農能者付し業名は川上七里あり  
傳の講の政記前帳料 而文  
是れより木の平海五十二里より七ん混成り  
新玉那を木玉のなる川舟はり政記前帳料  
以て五文内方文の勢の安んじりしものしりし  
本末通つる川ちあす中あす文の定なり  
始む村ひぢが川あす川とすぬらん二三文なり  
道成寺縁起より大文とす

粉の先

大塚の口はしちん三丈  
三郎の志のふ人位牌をうて日牌  
とくくの世くるるに思向あるなり  
慈母院のむねのむね  
常徳の寺のむねのむね  
去産寺のむねのむね  
鞍馬の寺のむねのむね  
有馬の寺のむねのむね  
大牛の寺のむねのむね  
とありお舟の二重一人のむねのむね

諸社の名は流村とありしや

有馬の寺のむねのむね  
大牛の寺のむねのむね  
とありお舟の二重一人のむねのむね

向きの寺のむねのむね  
二見浦の寺のむねのむね  
野尻の寺のむねのむね

長江のほとりには海軍とて稱せしむるありては大明神の  
はありては神の類も多しあり

新宮の平野にありては茶の産地ありては木立ありては  
天より降るる雨も大なるありては三日に一度は雨も  
あるありては七月十日十三日迄は雨降るるありては  
此の後には雨降るるありては雨降るるありては雨降るるあり

熊野の別荘の家の内ありては山ありては山ありては山あり  
天の山ありては山ありては山ありては山ありては山あり  
女は山ありては山ありては山ありては山ありては山あり  
さ乃山ありては山ありては山ありては山ありては山あり

那を熊野の山ありては山ありては山ありては山ありては山あり

山ありては山ありては山ありては山ありては山ありては山あり

かたは山ありては山ありては山ありては山ありては山ありては山あり



ありきよのちあはれに梅城しつむりかきしきよのちあはれに

書に書母の夢ありてあはれに梅城しつむりかきしきよのちあはれに

いふことありてあはれに梅城しつむりかきしきよのちあはれに

梅城のちあはれに梅城しつむりかきしきよのちあはれに

世のちあはれに梅城しつむりかきしきよのちあはれに

切支隊しつむりかきしきよのちあはれに

よりあはれに梅城しつむりかきしきよのちあはれに

このと珠のちあはれに梅城しつむりかきしきよのちあはれに

あはれに梅城しつむりかきしきよのちあはれに

あはれに梅城しつむりかきしきよのちあはれに

あはれに梅城しつむりかきしきよのちあはれに

あはれに梅城しつむりかきしきよのちあはれに

あはれに梅城しつむりかきしきよのちあはれに

あはれに梅城しつむりかきしきよのちあはれに

あはれに梅城しつむりかきしきよのちあはれに

あはれに梅城しつむりかきしきよのちあはれに

あはれに梅城しつむりかきしきよのちあはれに

寄りたりしとて蓋ふとてし大なる事あり  
昔古の事なり  
とゆふ

坂下すう神といふ所あり其日親言の同定跡に石あり  
又念佛格を授けたり所あり念佛中せば所行あり  
此の事なる所の事なり  
谷汲親言の事なり其の事なり二十三年ある事なり  
とゆふ  
此の事なり及て事なりたる事なり  
折る心ありたる事なり  
しれりたる事なり  
九年とせる事なり  
とゆふ

子規の筆  
子規の筆  
子規の筆  
子規の筆  
子規の筆

少少の事なり及て事なりたる事なり  
折る心ありたる事なり  
しれりたる事なり  
九年とせる事なり  
とゆふ  
此の事なり及て事なりたる事なり  
折る心ありたる事なり  
しれりたる事なり  
九年とせる事なり  
とゆふ  
此の事なり及て事なりたる事なり  
折る心ありたる事なり  
しれりたる事なり  
九年とせる事なり  
とゆふ



おもしろくもなれり身年の志をいふ我のまじりて  
しげに見るを常とす人の知を友が我の白星なるを喜ぶ  
此のてが高年の事とて却て思ふなり事思ふこそよけれを  
我をその面を思ふをよきものやうに思ひしゆあり又この  
るゆせにさたなり物鼻輝炮線火吹けを焚くを物  
鼻輝の敷を焚くは厄年の事又其厄を脱する事と  
わやそれより持ち袂をいれをいして焚きたるは効なし  
物をつけたるうして焚くは懐より手を解く事なり  
此のうらなを焚くは焚くは歌神をまじりて  
此は毒の火とていふかたなり  
甲子二の古くは  
と迄居これのな草鞋を踏むるは  
の意なりといふ

山海經云とふれ所の國あり其國名曰居の正は加也蓋其  
傍は海にあり形を多く書けり山海經云とて又より想像  
して書きたると思はれり其國名は女流と十里餘り  
たふの東の東にあり昔の地をいふは女をいふ  
勢より此の女とて可きまかへ地をいふは思ふ事なり  
やうなる事とて歌をいふは可きまかへ地をいふは思ふ事なり  
齊引はひききとて思ふ地をいふの地にあるとて思ふ事なり  
此の地の歌なること思ひてあり其地は女流の地なり向て  
解けたり虹の地なり(明)にしてはふつてとて思ふ事なり  
今にして思ふ事なり其地は女流なり(男)とて思ふ事なり  
又は女流とて思ふ事なり其地は女流なり(男)とて思ふ事なり  
又は女流とて思ふ事なり其地は女流なり(男)とて思ふ事なり





大正六年の... 流感... 大正六年の... 大正六年の... 大正六年の...

大正六年の...

大正六年の... 大正六年の... 大正六年の... 大正六年の... 大正六年の...

大正六年の...

大正六年の... 大正六年の... 大正六年の... 大正六年の... 大正六年の...

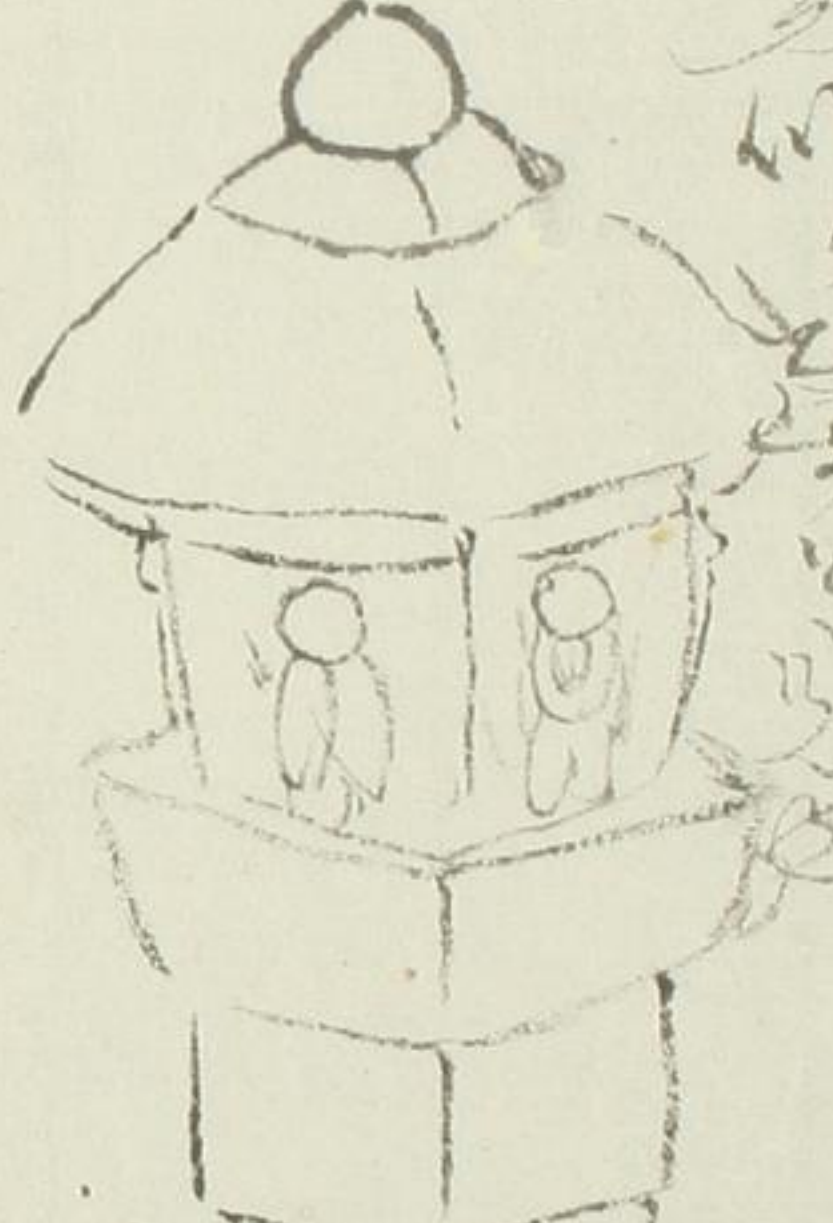






よもいふはのうまのたつた観音尊の供養の如く見ゆかしの  
 心成儀ふまのふたりのあかりの中を善の物なりし  
 因よを遣はるる因に今を二心ぬ久安の年終ありし  
 京師の近世寺のありし古老の説のありし應安の  
 年終ありし年終ありし年終ありし年終ありし年終ありし  
 多くの中及甘まの年終ありし年終ありし年終ありし  
 今都宮寺の清の庵寺の年終ありし年終ありし年終ありし  
 は此寺のゆかりのありし年終ありし年終ありし年終ありし  
 慶安のゆかりのありし年終ありし年終ありし年終ありし  
 説出し見ゆかしの又應安の年終ありし年終ありし年終ありし  
 此寺野好の元と應安の年終ありし年終ありし年終ありし  
 此寺野好の元と應安の年終ありし年終ありし年終ありし

このありの如くあるものありし  
 壬子のありしものありし  
 名をよむものありし  
 弘安のありしものありし  
 大坂のありしものありし  
 文政のありしものありし  
 天保のありしものありし  
 安政のありしものありし  
 嘉永のありしものありし  
 享和のありしものありし  
 元享のありしものありし



弘安寺の燈籠  
 此燈籠のありしものありし

此燈籠のありしものありし  
 弘安寺のありしものありし  
 大坂のありしものありし  
 文政のありしものありし  
 天保のありしものありし  
 安政のありしものありし  
 嘉永のありしものありし  
 享和のありしものありし  
 元享のありしものありし  
 此燈籠のありしものありし  
 弘安寺のありしものありし  
 大坂のありしものありし  
 文政のありしものありし  
 天保のありしものありし  
 安政のありしものありし  
 嘉永のありしものありし  
 享和のありしものありし  
 元享のありしものありし



三好 女室の墓

辰巳の墓

うす馬鹿  
うす野郎

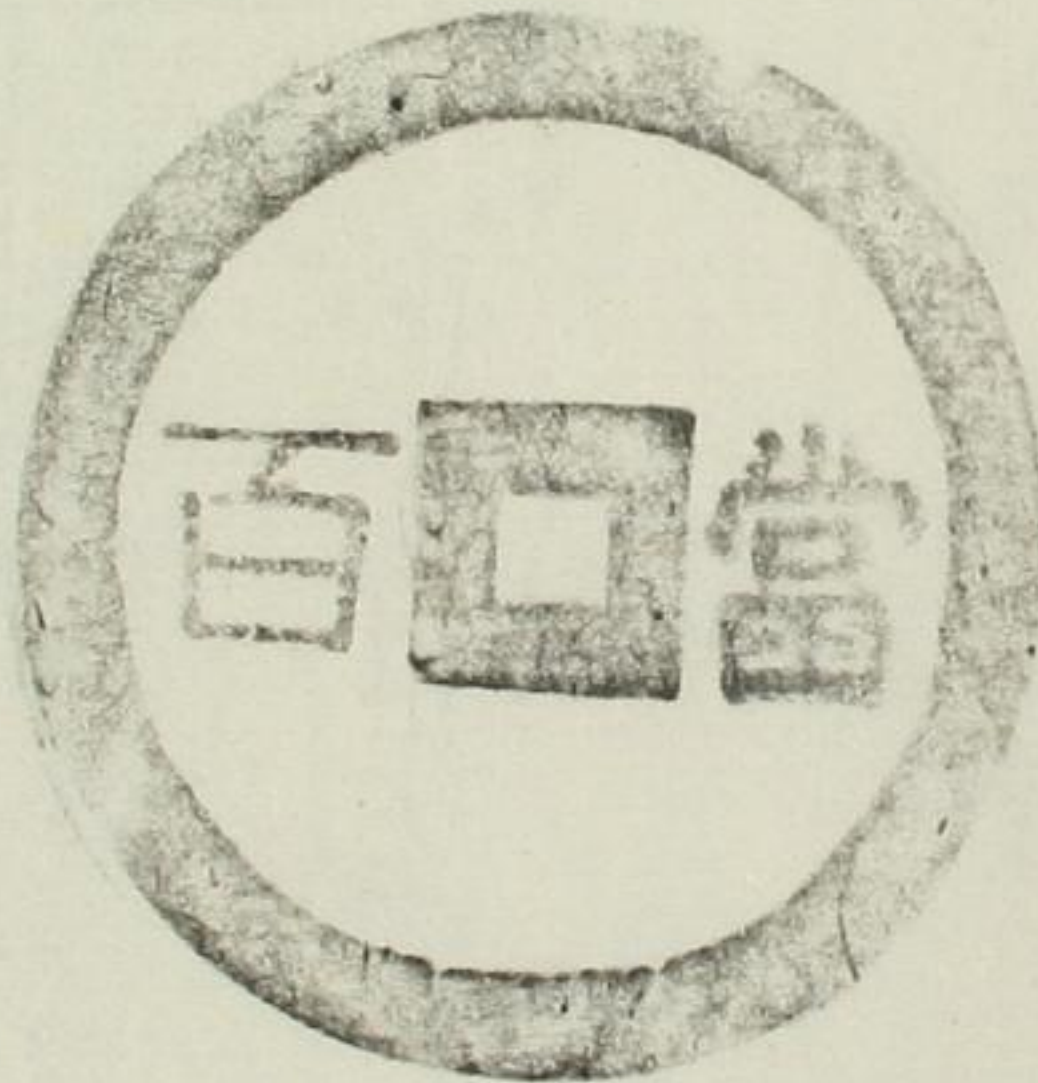
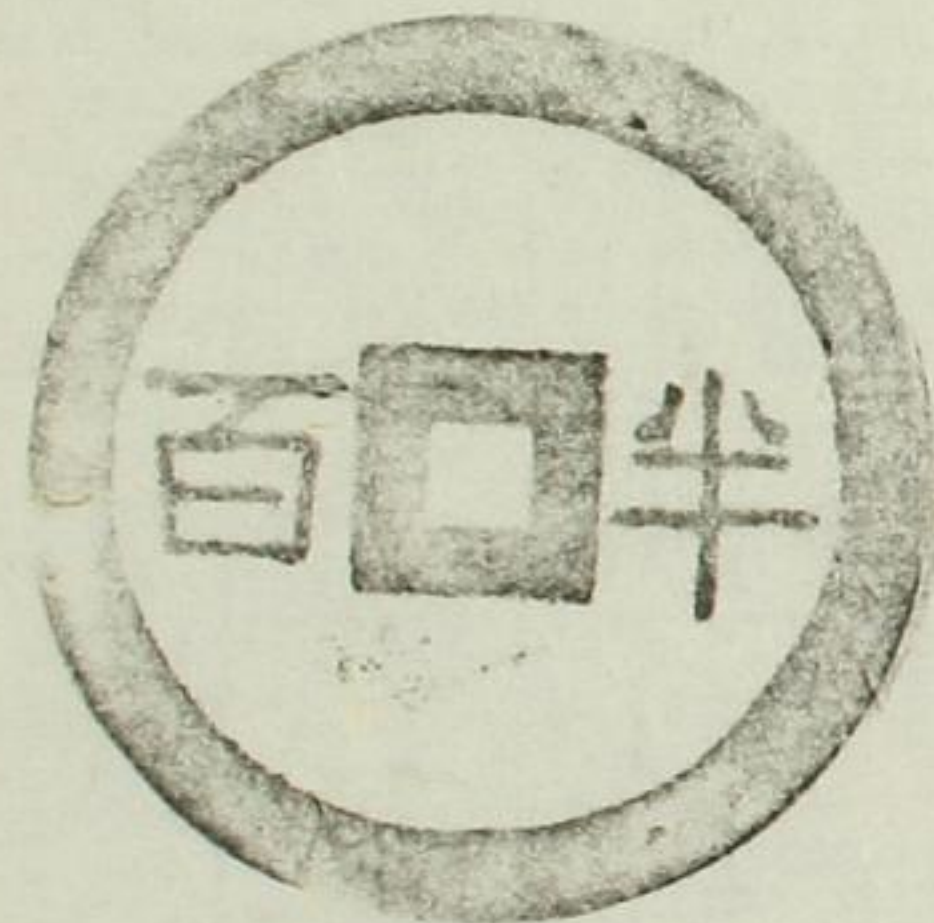
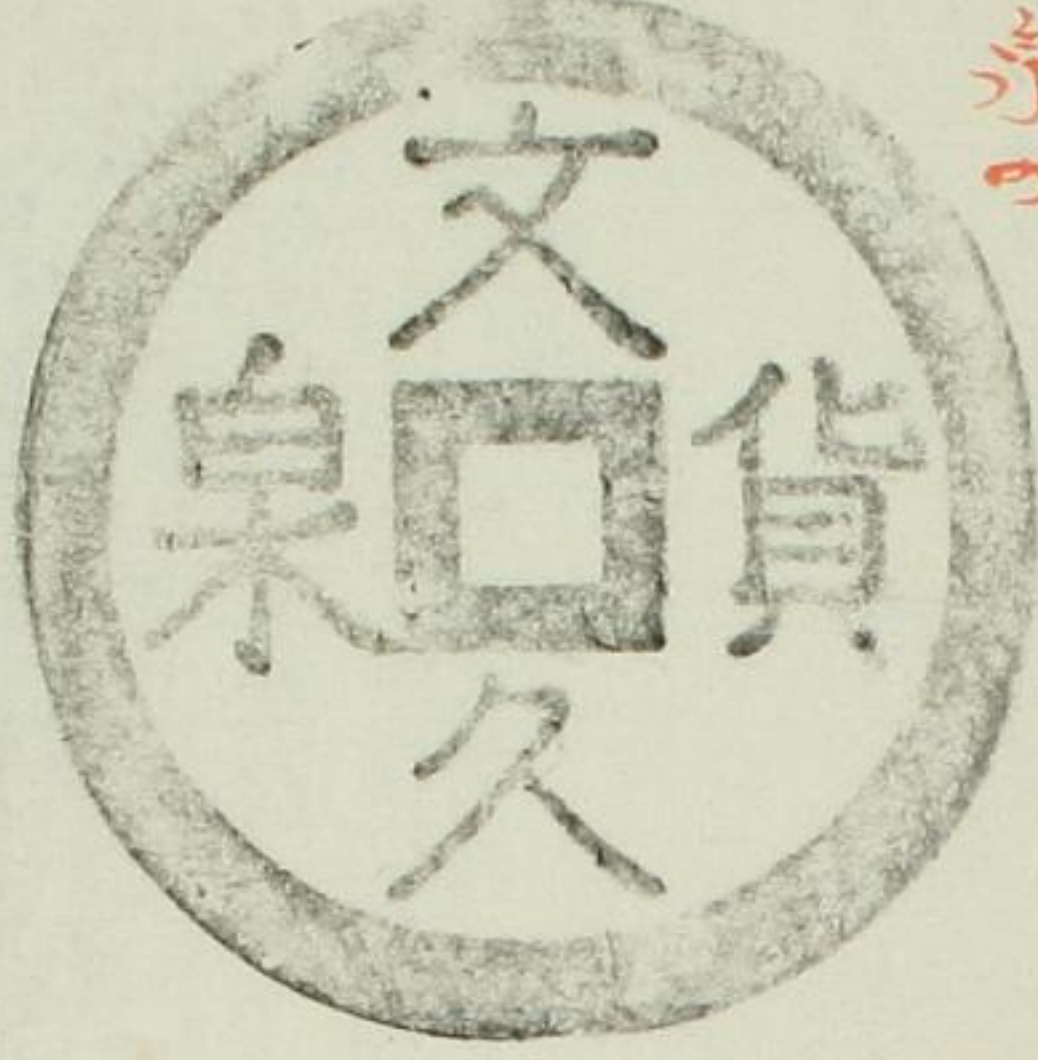
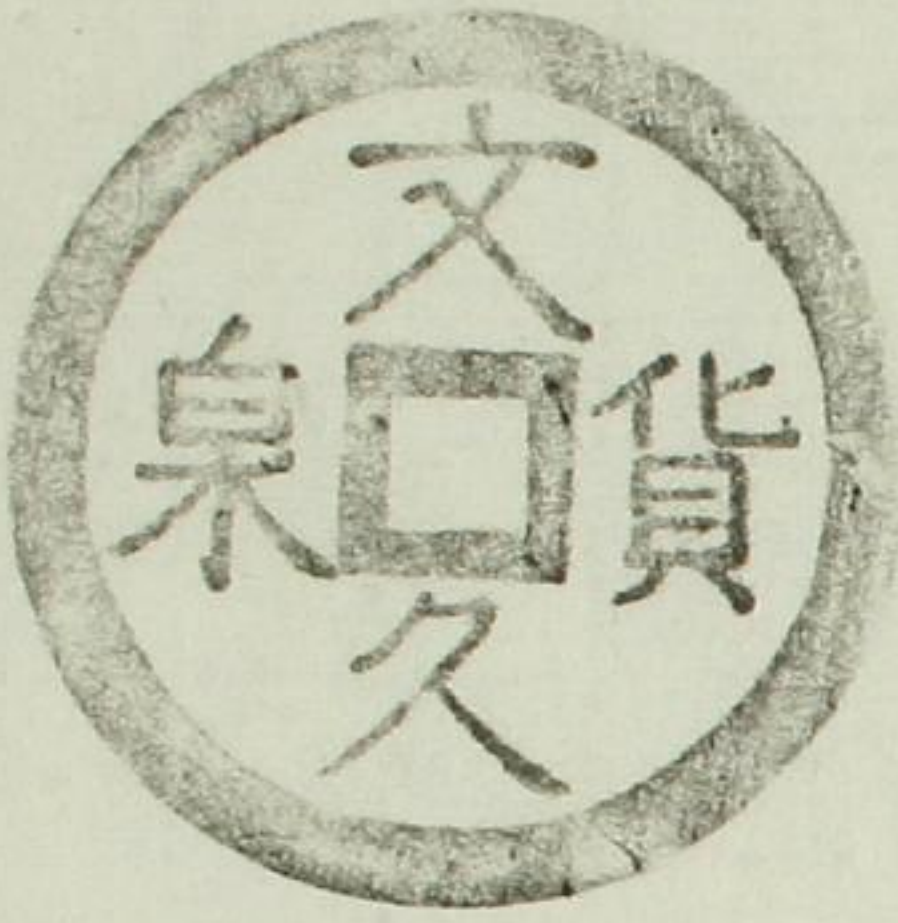
うす馬鹿  
うす野郎

此の如く使ふてある

女も熟識者支干考の支干の繪を画したる三好  
女室の墓は右平の長久院と同日造らるる

武田眞信の墓と云く  
つありり此の墓に辰巳の墓あり  
道心御まゝありの如く  
人の女體して

うす馬鹿うす野郎の恐るるうすは馬鹿の落し  
よりの墓をうす少の墓は少不得意をどの支那語  
と同じく少ハ欠の意を  
の墓にうすうすたる  
等何れも不明不暗と曰はるる



二鐵  
鑄造  
其の  
大正  
七年  
四月  
廿九  
日  
東京  
大塚  
町  
三好  
女室  
の墓  
に  
造ら  
るる

テニネキ  
のふきの  
まき

川柳

テニネキは乳母もかたがたすまふなり  
吉原へテニネキ死す十七屋

七福神記

テニネキとは孫父也方の言葉に  
乳母もたすにはいひのおまゝにて用せり  
又十七屋も乳母  
おの家流なり吉原へたす  
七福神に就て三巻教記  
狩野如榮より古きもの見ゆ  
天由大増山のつとまされしもの  
人望、清原、愛敬、威光、大量のセツとあらはせしもの  
元禄三年の佛像図景には  
辨方天、毘沙門天、大黒  
天、福祿壽司、布袋、蛭子、狸々のセツとあり  
二方也の「吉祥天と辨方天と二女天と」の壽老人と海老とあり  
隅田川七福神に比ぶひ女人の御方にしるおまの

諸説交せし理

此の諸説の御念店より大正蔵書ありて明い  
ほれてみやがれたぐものか燈いと影に  
の

幕戀 賦かひの置くものが鼻の  
あり下の衆のま 女政年向大つ  
行せ 日サコリ

熊野の年玉鳥のつきたみからすは  
鳥とは別煙と熊野からす一名那知鳥と  
死んでる者にはやらぬ燈と  
此の諸説のつとまされしもの  
熊野の年玉鳥のつきたみからすは  
鳥とは別煙と熊野からす一名那知鳥と

熊野年玉の鳥

幸田露伴の  
如き史記の  
の抄出

して大々転移せしむ遊連く頂の毛がまゝものにて那もの  
のより多くはるものとし鳥の深山鳥取味鳥こ  
まかろす添燕かろすとし里鳥の煙敷あり  
幸田露伴の如き史記行平に塚原乃右将の記あり  
大川小畑等皆野火那者尾等後友那の村に  
水戸家と称するもの多く大野原には百人塚なるもの  
あり又豊川曰野あたりには持神と唱へて電燈を  
安んずるものありとて塚は七日形にて電燈を  
いへて事二三ころとてなるといふ平めはるる  
つらつら前記の清元とて記しありてなるといふ  
に巧みありとて記しありてなるといふ平めはるる  
せす先の尾形かや否やもろぬを心算のぬえ

川記行に武甲山麓王権記塚起に平次代末が天宮天  
唐七年後文別書武見同其三七武綱云とて見  
まゝとて唐七年武光兼来り教を武家とて天宮少彦  
久命の如く指記のありとて記しありてなるといふ  
これ年武甲山の山麓とて記しありてなるといふ  
各社の其共はこれとて記しありてなるといふ  
も武光の如く武甲山とて記しありてなるといふ  
河内守たりとて記しありてなるといふ  
外に武見の如く武甲山の山麓とて記しありてなるといふ  
中にも武見の如く武甲山の山麓とて記しありてなるといふ  
この記しありてなるといふ  
この記しありてなるといふ  
この記しありてなるといふ



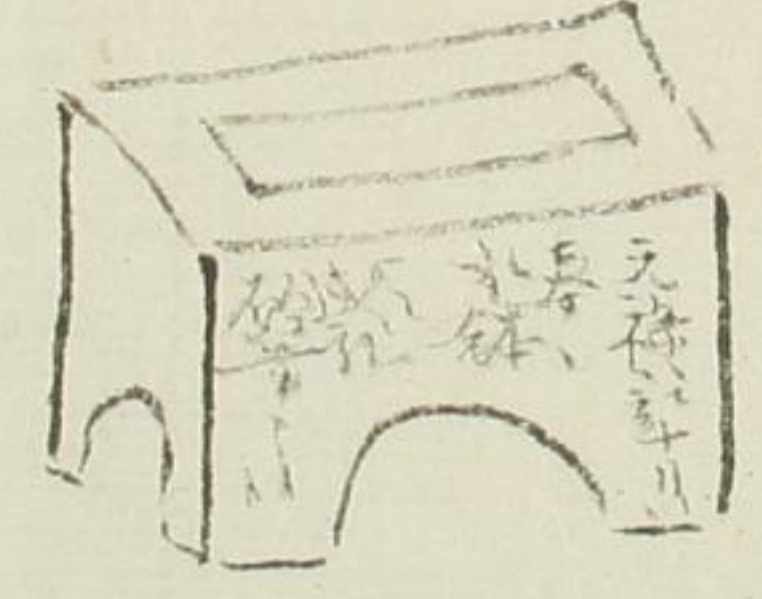
駿河大宮前  
神門  
の年

と馬場の名に...  
駿河大宮前...  
神門...  
の年...  
大宮前...  
神門...  
の年...  
大宮前...  
神門...  
の年...

難司  
水盤

難司谷鬼子神木堂  
元禄八年十月  
水鉢  
名あり

水鉢  
元禄八年十月  
名あり



志見  
火神

志見...  
火神...  
...  
...

大佛  
二

大佛...  
...  
...



一火佛を後持歩又七車を引通す可く都進  
か爰有る由自今七聖に相止る若相持る  
急度ア甲申事

一佛所鑄物師方而後三又以下一佛像造らる  
其以月番る番如詩出る因請て造る甲  
外より詠ふ其右る通可あら得るを三又以下の  
像後を詠不及事

度所造るの大佛也其下し七部を  
龍に於て修しよと見え一説は火佛と云ふ  
其下れが不出来ものも支のえ度ありの  
一説は火佛を造らるものも支のえ度ありの  
一説は火佛を造らるものも支のえ度ありの

火佛の  
造らるる

眼を  
火佛の  
造らるる

其の如年のひ方造えのひ  
其の如年のひ方造えのひ  
其の如年のひ方造えのひ  
其の如年のひ方造えのひ  
其の如年のひ方造えのひ

アラムイタ目痛とめ候のい候しのなる  
京都より行し途中に流行の咒を  
高山ノ紅丸シラビノ  
ヤスクウレベシ  
アビラウシケシ



温石の蓋を以て火を以て焼く事ありて  
其の蓋を以て火を以て焼く事ありて  
其の蓋を以て火を以て焼く事ありて  
其の蓋を以て火を以て焼く事ありて  
其の蓋を以て火を以て焼く事ありて

温石

温石

温石



温石の蓋を以て火を以て焼く事ありて  
其の蓋を以て火を以て焼く事ありて  
其の蓋を以て火を以て焼く事ありて  
其の蓋を以て火を以て焼く事ありて  
其の蓋を以て火を以て焼く事ありて

温石の蓋を以て火を以て焼く事ありて  
其の蓋を以て火を以て焼く事ありて  
其の蓋を以て火を以て焼く事ありて  
其の蓋を以て火を以て焼く事ありて  
其の蓋を以て火を以て焼く事ありて





割 横本武場の

四方の解牙来りて東西に分れたりと云ふ店敷の  
速兵衛徳次郎の妻と云ふ所十番の出生りて  
横濱の町場へお盆は田舎年向有る女将りて  
ありてお盆の人にてお盆は古くは星の世にや  
二徳兵衛半夜と云ふ者ありてお盆の知めしは  
もろくは活字と云ふ者ありてお盆の知めしは  
墨水道人と云ふ者ありてお盆の知めしは  
お盆の知めしは  
横本武場は夕夕アキと云ふと云ふ

共古日録三十九



廿九卷 六月  
目 七十四

